

趣旨説明

立教日本語教育実践学会は、日本語教育が行われている現場にこそ私たちが気づき、解決していくべき課題があるという信念のもと、小さいながら実践的な活動を続けています。大きな組織ではないので、なかなか大々的な活動を行うことができませんが、今回は、学習障害の1つであるディスレクシアをテーマとして取り上げ、ディスレクシアを抱える日本語学習者に対して、私たち教員がどんな支援が可能なのかを考えるきっかけとするため、シンポジウムを開催しました。

ディスレクシアという言葉は、近年、テレビなどでも取り上げられるようになり、やっと日本国内でもどのような学習障害なのかが認識され始めたところですが、欧米では、すでにディスレクシアをはじめとする学習障害に対する認知がかなり進んでおり、そのための学習支援もしっかりと行われています。

私たち日本語教師は、日々、海外からの学習者に対して日本語教育を行っています。つまり、自分の国ではしっかりと支援を受けていた学習者が、日本へ留学してみたら全く支援を受けられなかったという状況が発生するリスクがすでにあるということです。学習障害はその困難さの度合いも、どんなところに困難を感じるのかも個人差があるため、それぞれの学習者に寄り添った支援を実現していくためには、教師側の知識、スキル、そして熱意が必要です。また、学習障害を抱える学習者のためだけに特別なプログラムを準備するというのも、多くの教育機関では不可能でしょう。

しかし、私たち日本語教師は、これまでも数多くの困難を何とか乗り越えてきました。様々な国や文化圏、言語圏の学習者を同じ1つの教室で教えるという経験、学習者のレベル差にしっかりと向き合っただけで対応していくという経験、限られた時間の中でしっかりと学習効果を高めるための多様な教材、教授法を開発するという経験。そのどれもが、今の日本語教育の財産となっているはずですが。

だからこそ、私たちは、これからも新たな学習者の多様性である学習障害と真摯に向き合い、学習障害を抱える学習者が外国語として日本語を学んでいく機会を広げていきたいと考えます。もしかすると、とても困難で長い道のりなのかもしれませんが、それでもまず最初の一步を踏み出していきたいと考えます。

2016年9月24日。この一日の貴重な経験と「知」を多くの人と共有するために、日本語教育実践研究の第4号を「ディスレクシア学習者への日本語教育支援」という特集号としました。国内外で日本語教育に携わっている、またこれから携わろうとしている人々に少しでも役に立てば幸いです。

最後に、御登壇いただきました、原恵子先生、日暮嘉子先生、大島弘子先生、守時なぎさ先生、西澤芳織先生、林淑璋先生、司会と全大会のコーディネートをしてくださった丸山千歌先生に心から感謝の意を表します。

立教大学異文化コミュニケーション学部教授
池田 伸子